

# 板碑造立過程の検証

加藤光男

## はじめに

日本近世史学担当学芸員が、企画展「板碑が語る中世 造立とその背景」を企画・運営するにあたって、板碑の造立過程について知見を得たことから、「出土板碑からみた製作工程の復元」<sup>(1)</sup>を公にした。しかし、この拙稿では、導き出した結論と先行研究である千々和實氏の論考<sup>(2)</sup>との関連について言及できなかった。

千々和實氏は、「(前略) 種子さえも刻まれていない半製品が多数あり、或いはまた、種子だけが刻まれた次の段階の半製品が多数ある。この様に完成に向かった二つの段階の半製品板碑が、それぞれ多数存在する限り、この地は板碑の工作場であったと解せざるを得ない。即ち、この付近の採石場でとった青石を、この工場で板碑にまで工作するのだが、それが数段階に工作され、半製品のまま遺ったものと解される。」と言及している。そして、千々和到氏は、この論考を、「板碑は秩父で作られるのか、石材が運ばれて、塔の建てられるところで刻まれるのかについては、以前から議論がわかれているが、彼は大量の未完成板碑の存在から、石材供給地近くで形と種子まではつくられると結論した。全ての時代、全ての板碑にあてはまるかどうか問題が残ると思うが、重要な発見だったことは間違いない。」と評価している。

本稿は、千々和説との対応関係について述べることを第1の課題とする。そして拙稿に寄せられた疑問や批判に答えるものである。第2の課題として、造立の推移について言及する。

## 1 千々和説との関係について

まず、本稿で扱う時代について明らかにしておく。千々和實氏が「(前略) 初発期に近いほど、また発注者の地位・勢力が大きいほど、大型で、独特・珍奇・複雑な表現があり、それだけ個性的である。(中略) 十四世紀頃になると、需用者層が広く厚くなつて、行きつくところ、この二要素(=種子と年紀: 中略部分より筆者補足)だけを刻んだ板碑既製品が現われ得る条件がととのつたのである。(中略) ある時期になると、一般需用者は大体、既製品で間に合わせたであろうと思われる。」<sup>(2)</sup>との言及があり、時期設定については筆者も同意見である。また、石材採掘地から発見された板碑未成品も今のところ14世紀頃としている<sup>(3)</sup>。このことから、対象時期を南北朝時代(=大量需要期)に限定する。

緑泥石片岩製板碑石材の採掘地のひとつ、埼玉県比企郡小川町割谷においては、板碑用の石材として受注されており、頭部の山形が形造られ、正面と背面が区別されるなどの表面加工が施されていた。一方、現在のところ、二条線や枠線、種子や年紀などの刻みのあるものは発見されていない。つまり現段階では、「採掘地では外形の荒成形まで」であったと判断する。

次に、鎌倉街道上道の宿・今宿に隣接する板碑一大造立地のひとつ、通称「おしゃもじ山」で発見された板碑は、頭部山形の整形および正面の平面化という2次加工の痕跡が確認され、造立地において外形の追加加工がなされていたことを示す事例となった。

また、久喜市（旧菖蒲町）長龍寺から発掘された板碑には、外形の整形および正面の研磨加工が施されているものの、枠線のみ刻まれた（＝主尊の種子はない）板碑、種子までが刻まれた板碑が複数確認されている。以上のことから、種子までが刻まれた（＝年月日、発注者または受注者名、造立趣旨、真言・偈文などは刻まれない）半製品があることを確認した。

以上の拙稿で提示した事例と千々和氏の論考との相違点は以下の通りである。

千々和氏の指摘する、製作工程に段階がある、工程ごとに製作場所が異なるとする枠組みには包括されるものであり、その域を脱してはいない。

しかし、千々和氏は、①製作段階において、阿弥陀種子および年紀（日付は除く）まで刻んだものを既製品としているが、私は種子のみ刻まれた板碑が各地で多数確認されていることから、個別発注を受けるまえに刻まれる（＝既製品・半製品段階）のは枠線と種子までであると考えている<sup>(4)</sup>。つまり既製品段階では年紀は刻まれていないと考えている。千々和氏は、②種子や年紀（日付は除く）を刻んだ場所を児玉郡や秩父郡の山麓としているが、種子の刻まれていない板碑がこの地域以外でも確認されていることから、種子を刻むのは造立地近くの工房と考える。これは、千々和氏が発表した時期と私が検討するまでの間に多くの事例が報告されたことによるもので、千々和氏が発表した段階における情報量の違いに起因するものである。千々和氏が示した事例は、児玉郡や秩父郡の山麓地域に造立する目的で集石・加工した事例であると私は考えている。

①について千々和氏は、③「府中市高安寺には、【釈迦の種子】（＝原著書では梵字による記載。以下同じ）だけで年号月日のまったく刻んでいないものがある、（中略）しかし【釈迦の種子】は余り多くは需要者がないので、日附はおろか、年号さえも工作場では刻みこまなかったのだろう。」、④「種子と紀年文字の彫刻技巧に著しいちがいを見るのは普通である。」とも言及している。④については私も同意見であり、主尊の種子を刻む者と紀年や造立者名などを刻む者が異なると考えているが、③については先に記したように見解を異にする。

②については、近年の研究により種子や蓮座の形態に地域性があることが確認<sup>(5)</sup>されたことから、一定の場所で集中作製した後、各地に配達されたとは考えにくい状況にある。

現状では、南北朝時代において、a 石材採掘地では外形の荒成形まで、b 造立地では枠線、枠線と主尊の種子までが既製品として刻まれる場合があり、c 発注者の要望に応じて、年月日、造立者、造立趣旨、真言・偈文、天蓋などの莊嚴などを刻むという3段階があったと考える。

なお、種子のみ刻んでいる板碑として現存していても、年紀や人名が墨書きされていた、また紙に書かれて貼ったもので、現状では未完成品に見ても完成品であったとする意見がある。板碑には、金泥、朱、墨などで彩色されている事例は多く確認されており、五輪塔や宝篋印塔では朱や墨で文字を記した事例が確認されている。今後、先の指摘に対応するために、種子のみ刻まれた板碑の再調査が急務と思われ、私も調査実施中である。成果が出したい報告したい。

以上のように、主尊の種子を刻む者と紀年銘などを刻む者が異なることは間違いない。このことが、種子を刻む作業と、紀年銘などを刻む作業の間に段階があったとする裏付けとなるのか否かは今のところわからない。時期も材料も異なるので比較対象にはならないかもしれないが、江戸時代の浮世絵（木版画）は、人物の顔を削る上級の彫師と、背景や衣装の柄などを刻む彫師というように分業させていたことが確認されている。彫りの技巧の違いは、工程差（時間差）ではなく作業従事者の違いより起因している場合も想定しなければならない。

## 2 造立工程の検証

### (1) 加工方法について

板碑の整形方法には、板碑独自の技法として、平刃のノミによって帯状に削る、「押し削り」という技法が確認されている<sup>(6)</sup>。私は、①石材採掘地では正面加工は押し削りによる整形、②造立地近くの工房における正面の最終整形時には、平刃のノミを板碑に立てて小刻みに押しあてる技法で凹凸を少なくした後、板碑石材もしくは板碑石材よりも堅い石材で磨くという2段階があると言及した。拙稿でも拓本でその事例を掲載したが、板碑の製作は、押し削りによるものとの意見をいただいた。このため再度、拓本を掲載する。図1が採掘地で発見された板碑未製品の正面に遺る整形のための押し削り痕である。この痕跡は完成した板碑の背面に遺る痕跡（押し削り痕）と同じである。図2は「おしゃもじ山」で発見された未製品板碑の正面に遺る痕跡である。比較する意味で今回、青泥石片岩を石材、現在の平ノミを道具として、二つの技法による再現結果の拓本を掲載する。図3は押し削りしたものの拓本。図4は平刃のノミを垂直に立てて敲いたものの拓本。これらを比較すれば、板碑正面の平面化に際しては、①押し削り、②ノミを立てて敲く、③砥石などで磨くの3技法があったことは明白である。

### (2) 石材の入手方法

板碑のなかには、ポットホールと呼ばれる穴を見つけることがある。この痕跡から、板碑の石材が、「山採り」だけではなく「川採り」によっても行われていたことが明らかになっている。この穴が人為的である可能性についてご意見をいただいた。この件については、人為的な削り痕との見分け方などを提示した渡辺氏による優れた論考<sup>(7)</sup>があり、私にはそれに付言することができないので、渡辺氏の業績を参照いただきたい。

なお、板碑に遺る溝痕の一部が古墳石棺材の石材の組み合わせ部分の溝痕である板碑が確認されたことから、古墳石棺材を転用した板碑の事例が明らかになった<sup>(8)</sup>。このため、大型板碑の石材の再検討が進められている。古墳石棺の石材組み合わせ部分の溝痕が残る板碑が僅かであることから、新たな視点として板碑の側面加工の痕跡と古墳石棺材の側面加工の痕跡の比較が行われている。この視点においては、石材の加工法が伝承されたことも念頭に置き、大型板碑の側面で板碑固有の加工痕を見いだせなければ、板碑側面と古墳石棺材側面の加工痕が同じことのみで石棺材転用であると短絡的に結論づけてはならない。

## 3 板碑造立の推移について

板碑の確認総数は、再調査や発掘による発見により日々増加している。本稿でまとめたものも実際に造られた板碑の一毛に過ぎない。しかし、埼玉県と東京都でまとめた板碑調査報告書から30年経た現在、当時の把握状況と2010年現在の把握状況の違いを言及することも意味があるものと考え、今回提示することにした。

### (1) 埼玉県の場合

1981年の調査報告書には、総計20,201基の板碑（このうち年号のわかる板碑9,756基<sup>(9)</sup>）に関する年代ごとの造立数の推移を示した表を掲載している。報告書作成後、新たに発見・発掘された資料を補ったところ、総計27,457基（うち年号のわかるもの11,606基）であった。総数で報告書刊行時の約35.9%増、年号のわかるもので約18.9%増である。今回の調査結果をもとに作成した表が表1

である。初見の嘉禄3年(1227)から鎌倉時代後半にかけて増加傾向にある。そして、元弘の乱(1331年)から南北朝の統一(1392年)までの南北朝時代が隆盛期であり、1360年代にピークがある。その後、扇谷・山内の両上杉と古河公方の対抗期(1454~1590年)に微増した後、衰微して慶長期に消滅してしまう。この傾向は、30年前の報告書と同じ結果である。これまでの表は、西暦下一桁が0~9までの10年を1単位としている。しかし、当時の政治史は西暦に影響されていた訳ではない。このことから、今回、鎌倉幕府の滅亡が1333年、南北朝の統一が1392年であることを勘案して、西暦下一桁が3からの10年を1単位とした表2を作成してみた。二つの表を比較して、大きな傾向に差はみられないが、表2から1353~1362年と1363~1372年がほぼ同数であることが確認される。板碑を造立活動の隆盛は、この20年間の政治・社会・信仰・宗教の状況を反映したものと断定してよかろう。

## (2) 東京都の場合

東京都域の統一的な板碑調査の結果は、1979・80年2か年に刊行した2冊の報告書にまとめられており、埼玉県と同時期の調査といえる。その結果は、比留間博氏によってまとめられている<sup>(10)</sup>。比留間氏の集計時点では、総計8,743基(うち年号のわかるもの4,962基)であった。今回の集計時では、総計10,136基(うち年号のわかるもの4,981基)<sup>(11)</sup>である。先の集計よりも総数で約15.9%増、年号のわかるもので約0.4%増である。今回の調査結果をもとに作成した表が表3である。これによれば、全体の傾向は埼玉県と同様であり、ピークも1360年代にある。埼玉県同様に政治史を勘案して集計したものが表4である。これによると、埼玉県域では、1353~72年の20年間にピークがあるのに対し、東京都下では、1393~1402年が最多、ついで1363~1372年であり、1353~1362年は第4位であることに特徴があらわされた。

東京都下の最古の板碑は、宝治2年(1248)と埼玉県下の日本最古の板碑に約20年遅れる一方、埼玉県下の最新の板碑が1598年なのに対し東京都下では1604年までくだる。また、既に比留間氏により指摘されているが、23区域においては14~15世紀の200年間、ピークはあるもののほぼ同程度の数値であるのに対し、多摩地区においては、埼玉県同様、普及・衰退の推移が急であったことが再確認された。このことから、板碑造立の推移および消長には地域差があることが今回も確認された。郡単位など地域ごと、河川や主要街道沿いなど物資の流通経路との関連からの再検討、地域史との関連性における分析が必要であることを改めて痛感する。

## (3) 埼玉県と東京都の事例を合わせた場合

まず、埼玉県域における単年ごとの板碑の造立推移をあらわしたものが表5である。全体の傾向としては、10年単位のグラフと同じ傾向を示す。

単年ごとにみると、最多が①貞治7・応安元年(1368)で造立時期378年間の約3.58%、以下、②明徳5・応永元年(1394)で約2.97%、③延文6・康安元年(1361)で約2.57%、④康暦2年(1380)で約2.33%、⑤康安2・貞治元年(1362)で約2.29%、⑥嘉暦4・元徳元年(1329)で約2.25%、⑦康暦3・永徳元年(1381)で約2.17%、⑧貞治4年(1365)で約2.15%、⑨文和5・延文元年(1356)で約2.13%、⑩貞治6年(1367)で約1.95%で、この10年で全体の約24.39%(約4分の1)を占める。また、上位10のうち、②・⑥は南北朝期以外である(隣接した時期ではあるが)。1368年は平一揆の河越館籠城、1380年は足利氏満の出陣、1362年は白旗一揆らの出陣などがあり、戦が原因で造立が増えたと考えられるが、現状では原因が不明なものもある。しかし、一つの特色として改元し

た年に多く造立していることがわかる(たとえば上位20のうち改元した年が12年ある)。改元する理由のひとつとして、天災や飢饉など政治・戦争など人為的な理由でない場合があることから、このことが造立に影響しているのかもしれない。

次に、武蔵国一国の動向を探るために、対象地域としては不十分であるが埼玉と東京の数値を集計し作成したものが、表6である。

最多が、①貞治7・応安元年で造立時期378年間の約1.45%、②明徳5・応永元年で約1.43%、③延文6・康安元年で約1.06%、④貞治4年で約0.97%、⑤康暦2年で約0.94%、⑥康安2・貞治元年で約0.92%、⑦康暦3・永徳元年で約0.88%、⑧嘉暦4・元徳元年で約0.85%、⑨貞治2年(1363)で約0.82%、⑩文和5・延文元年で約0.80%で、この10年で全体の約10.12%を占める。埼玉県域と比較すると、貞治6年のかわりに貞治2年(埼玉県域では19番目)が入っている、多少の順位の変動が認められるが、南北朝期とその隣接時期に集中していることに変わりはない。しかし、その集中度は埼玉県域と比較すると下がっており、東京都域では、埼玉県域よりも増減の度合いが緩やかであることが実証される。

今回は、概要を述べたに過ぎないが、郡単位でみても地域差がある。また、武蔵国単位で論じるのであれば、神奈川・茨城・千葉県の一部を含めなければならず、緑泥石片岩製の板碑について総体的に論じるのであれば、先の県のほか群馬・栃木・山梨県などについても範囲を広がなければならない。このことについては、今後の課題としたい。

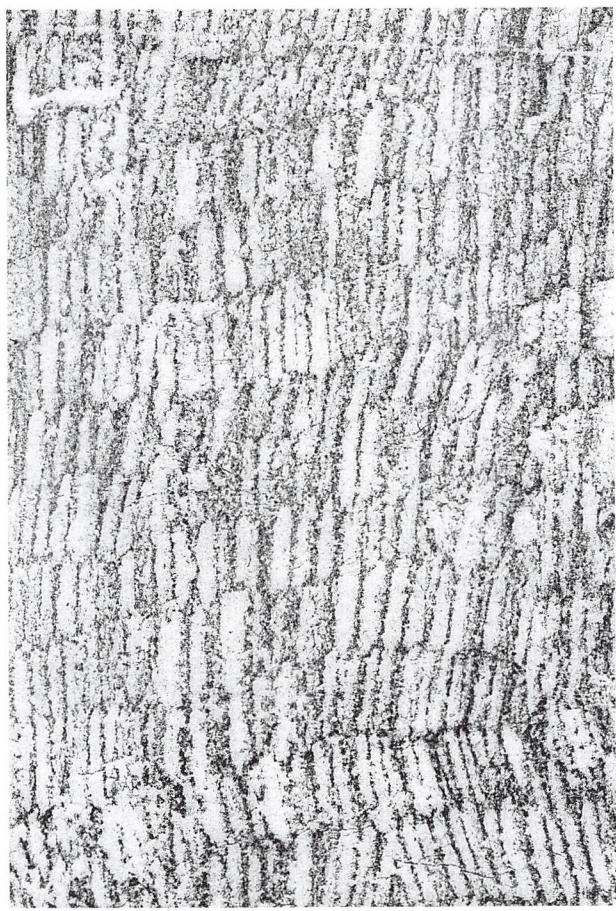
最後になりましたが、本稿をまとめるにあたり、三宅宗議氏から懇切なるご助言・情報提供を、高橋好信氏から未製品板碑の調査の際にご協力いただきました。心からの謝意を表します。

### 《註》

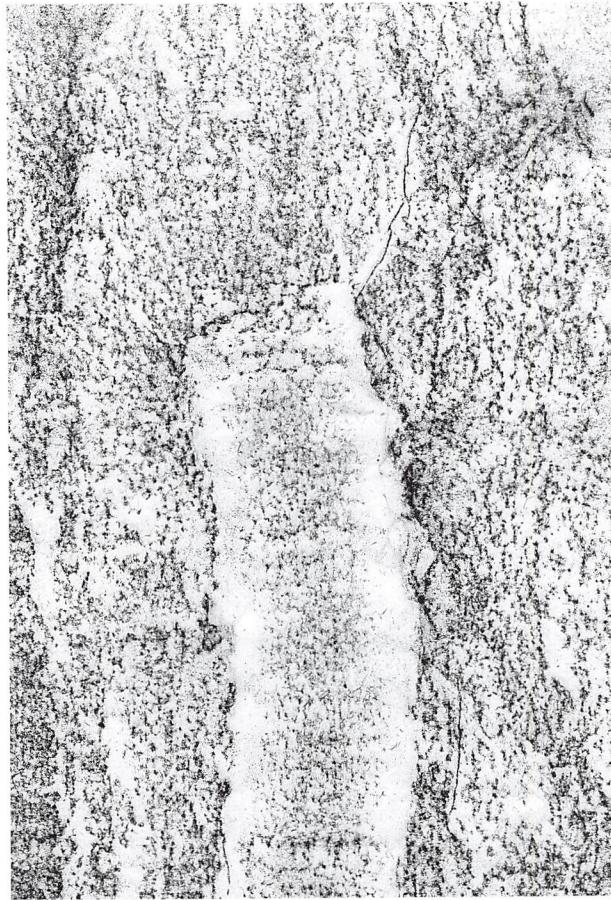
- (1) 『埼玉県立史跡の博物館研究紀要』第4号・2010年に収録
  - (2) 千々和實「板碑工作と中世商品の供給源の一考察」(『上武大学論集』3・1971年)。のち、同『板碑源流考 民衆仏教成立史の研究』(吉川弘文館・1987年)に収録。以下、特に断らない限り、千々和氏の説とはこの論文からの引用である。
  - (3) 磯野治司・伊藤宏之「小川町割谷採集の板碑未成品」(埼玉考古学会『埼玉考古』第42号・2007年)なお、この論文では指摘されていないが、板碑未製品が採掘地で発見されたことは、採掘地において採掘石材が板碑用であることが認識されていたことを実証する点でも重要なことである。
  - (4) 板碑を再調査した結果、年月日や人名が枠線に重なる・はみ出して刻まれている事例を複数確認している(正法寺所蔵資料など)。そして刻みの痕跡から枠線が先に刻まれていたことがうかがえる。一例として、『(企画展示図録) 板碑が語る中世 造立とその背景』(埼玉県立嵐山史跡の博物館・2008年)に写真掲載。ただし、この図録を執筆した段階では完成した板碑の再利用と判断したため解説文では、中世における再利用された板碑の事例として紹介している。
  - (5) 一例として、「(フォーラム発表資料集) 板碑と中世びと」(葛飾区郷土と天文の博物館・2008年)
  - (6) 渡辺美彦「大田区万福寺板碑の押し削り技法について」(東国文化研究会報告レジュメ・1999年)
  - (7) 渡辺美彦「川採りの板碑石材に関する二、三の報告」(歴史考古学研究会『歴史考古学』52号・2003年)
  - (8) 伊藤宏之・磯野治司「朝霞市東圓寺の石棺材転用の板碑」(『朝霞市博物館紀要』第11号・2008年)
  - (9) 今回の数値は、年号のみ残存する資料は除いている。
  - (10) 比留間博「東京都」(坂詰秀一編『板碑の総合研究 2 地域編』柏書房・1983年)
  - (11) 国立歴史民俗博物館のホームページ上で公開されているデータベース「東国板碑」(2010年12月現在)を参考にしながら、各区市町村の報告書等により補正を行った。
- 《補》近年の板碑研究の成果は、「特集 板碑研究の最前線」(『考古学ジャーナル』602・2010年7月)を参照されたい。



1 割谷出土の未製品板碑の正面（原寸）



2 おしゃもじ山出土の未製品板碑の正面（原寸）



3 刃幅24mmの平ノミを使用した押し削り痕（原寸）



4 刃幅24mmの平ノミを使用した調整痕（原寸）

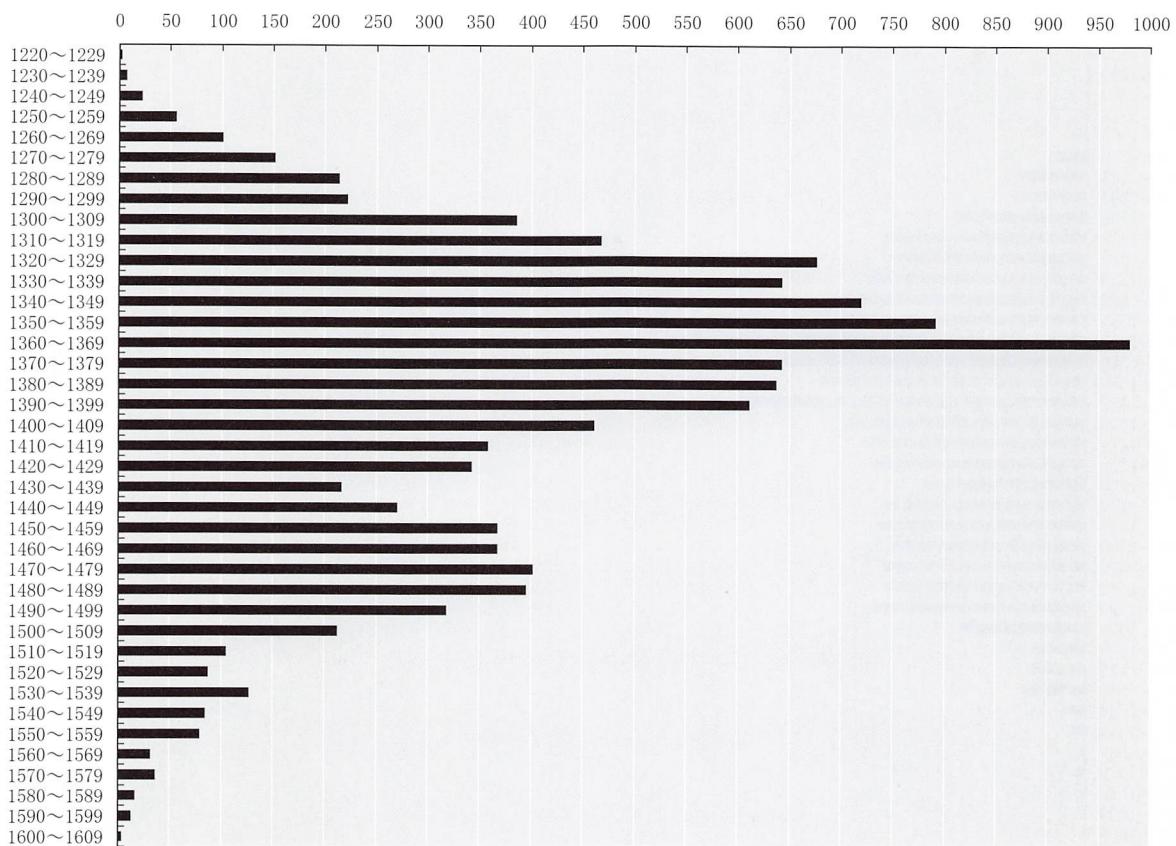


表1 埼玉県域の板碑造立の推移1 (10年幅: 0年～9年)

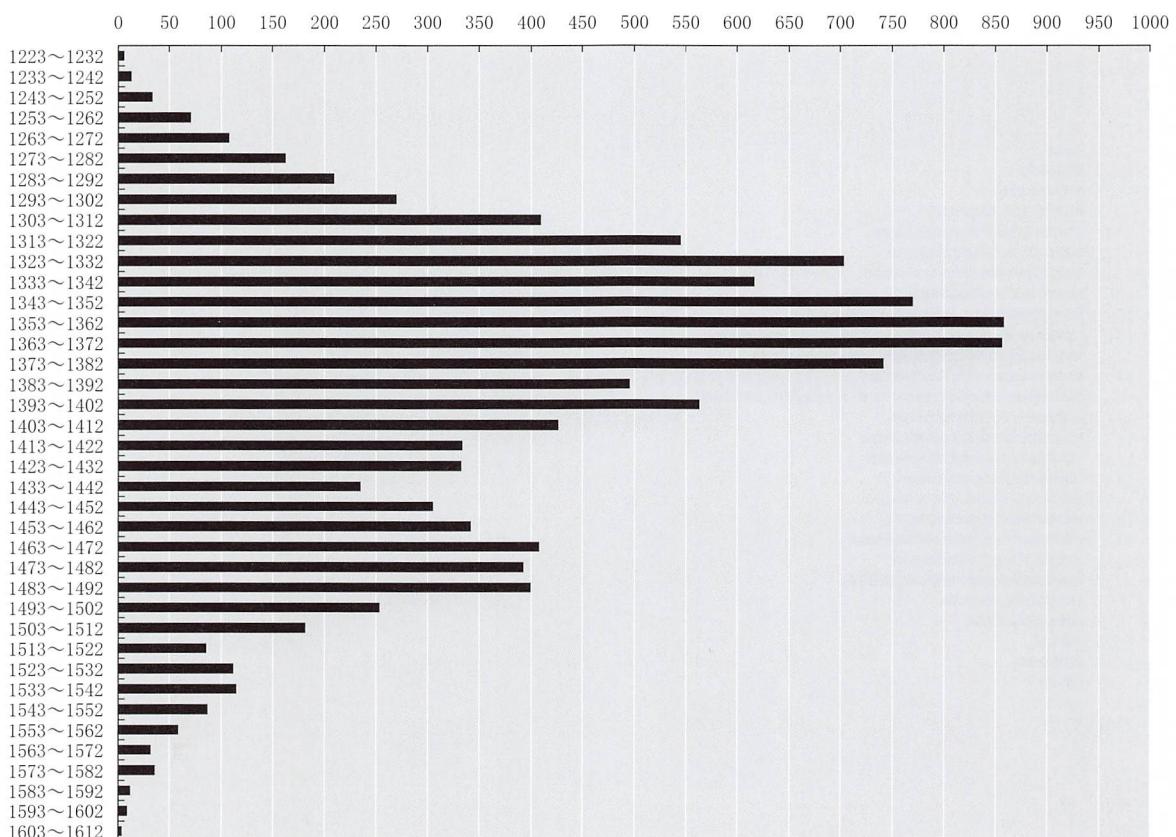


表2 埼玉県域の板碑造立の推移2 (10年幅: 3年～2年)

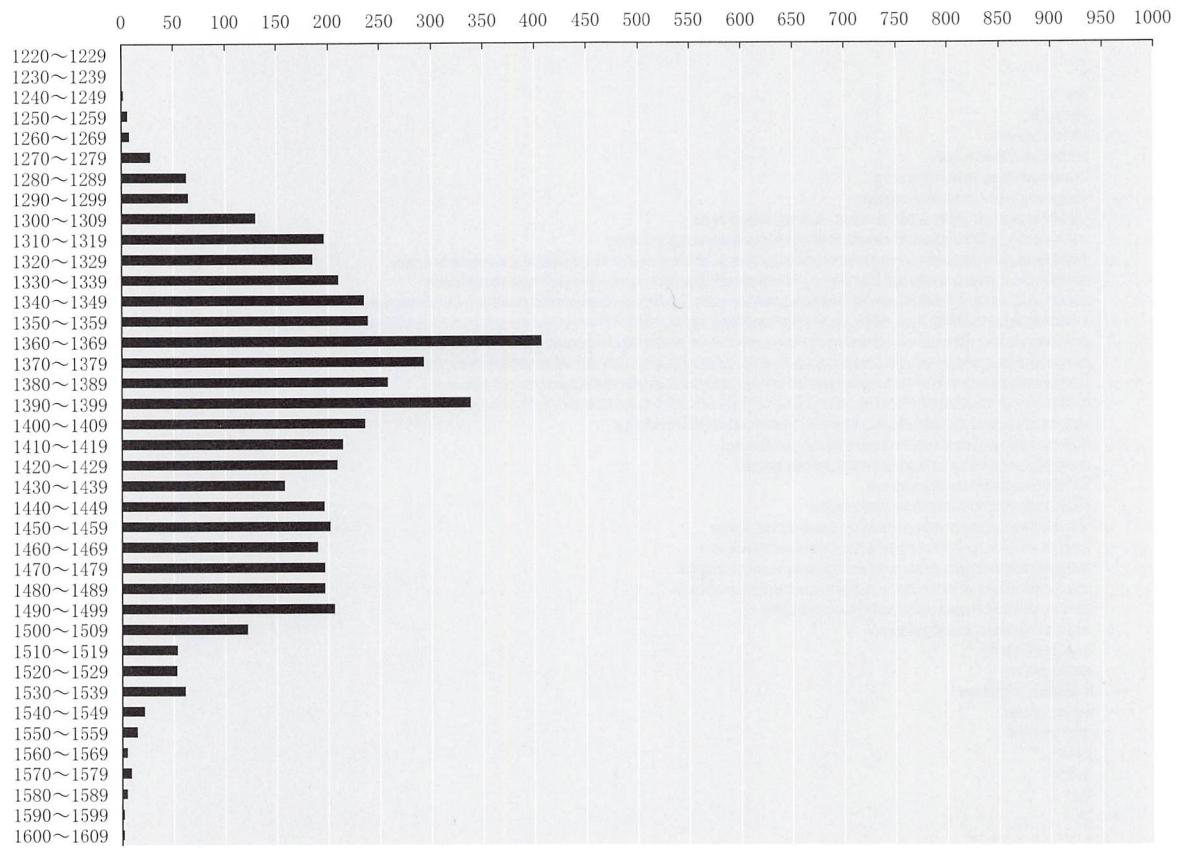


表3 東京都域の板碑造立の推移1 (10年幅：0年～9年)

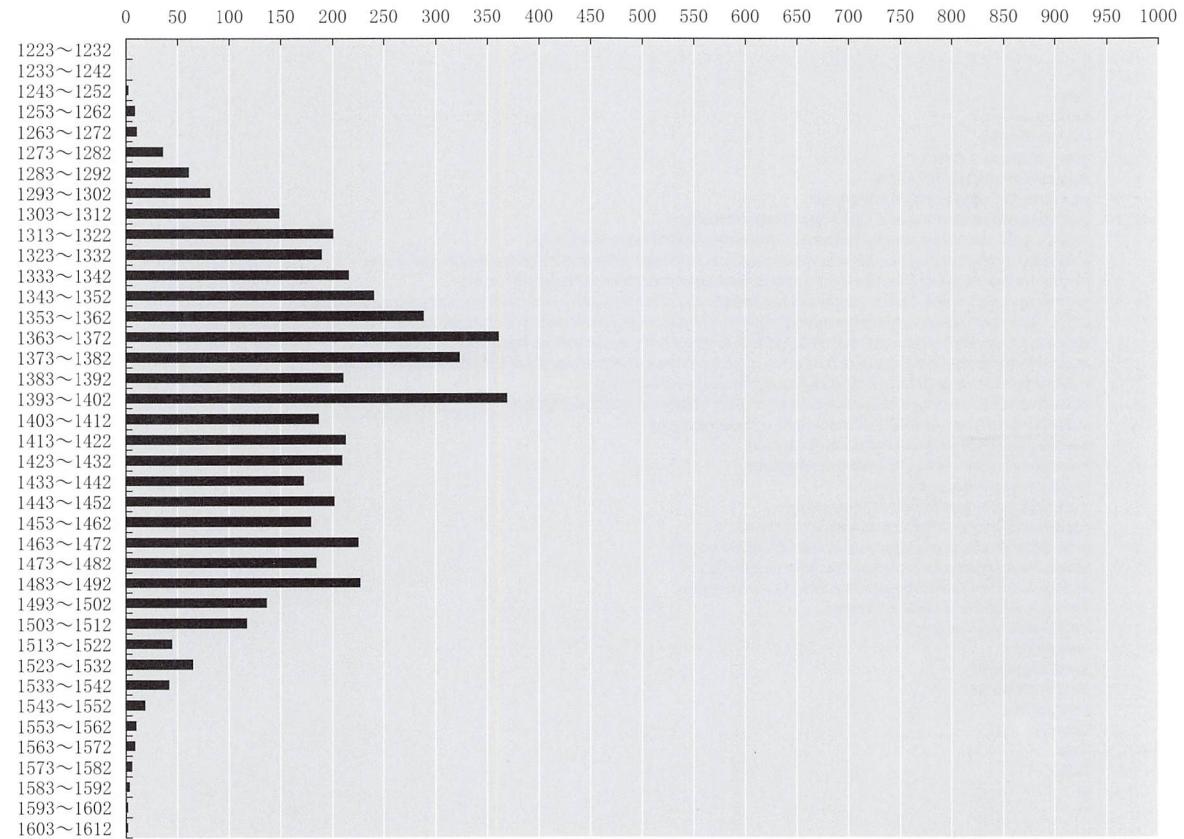


表4 東京都域の板碑造立の推移2 (10年幅：3年～2年)

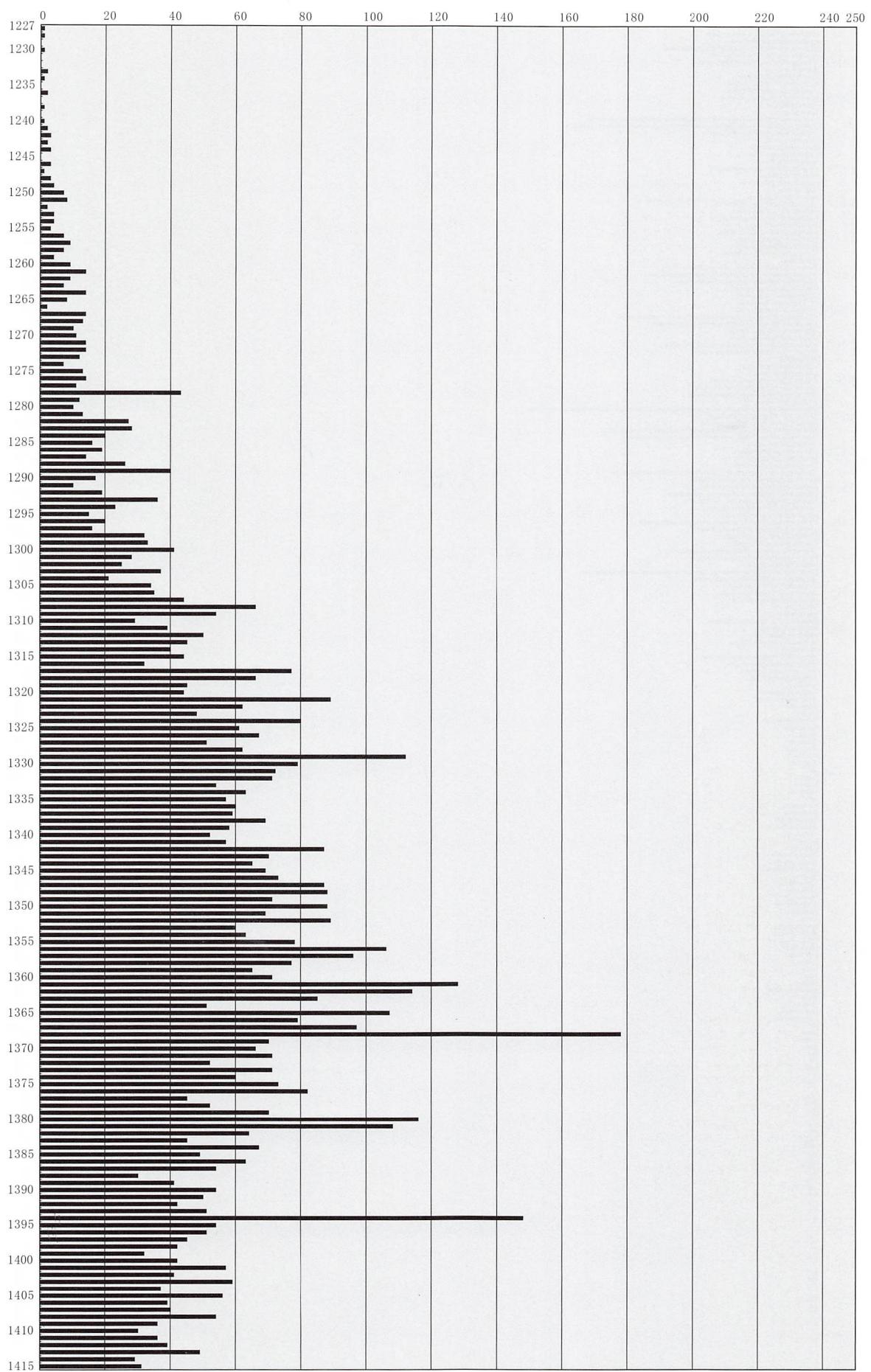


表 5-1 埼玉県域の板碑造立の推移（1年幅）

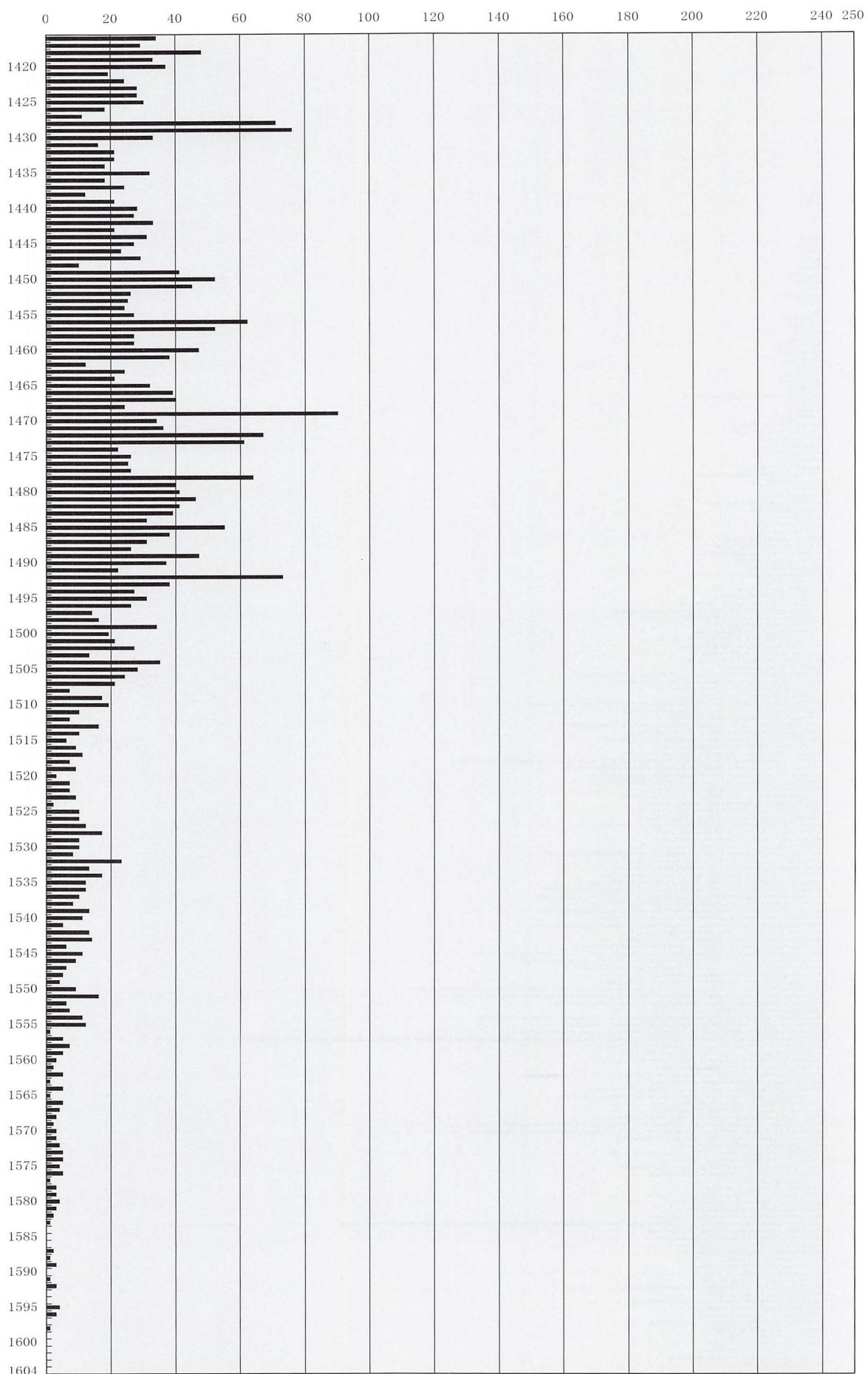


表 5-2 埼玉県域の板碑造立の推移（1年幅）

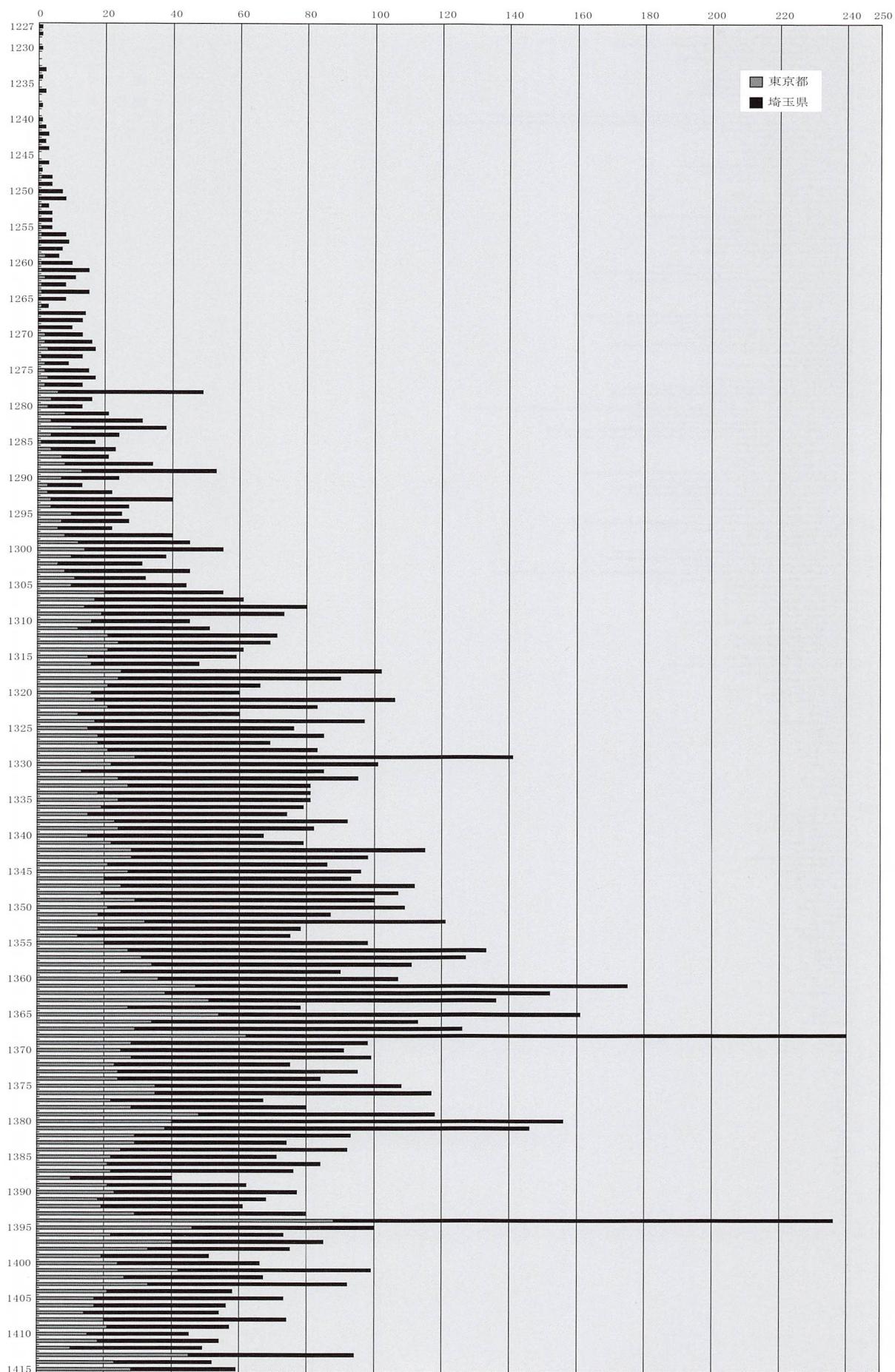


表 6-1 武藏国（神奈川・茨城・千葉県域分を除く）の板碑造立の推移（1年幅）

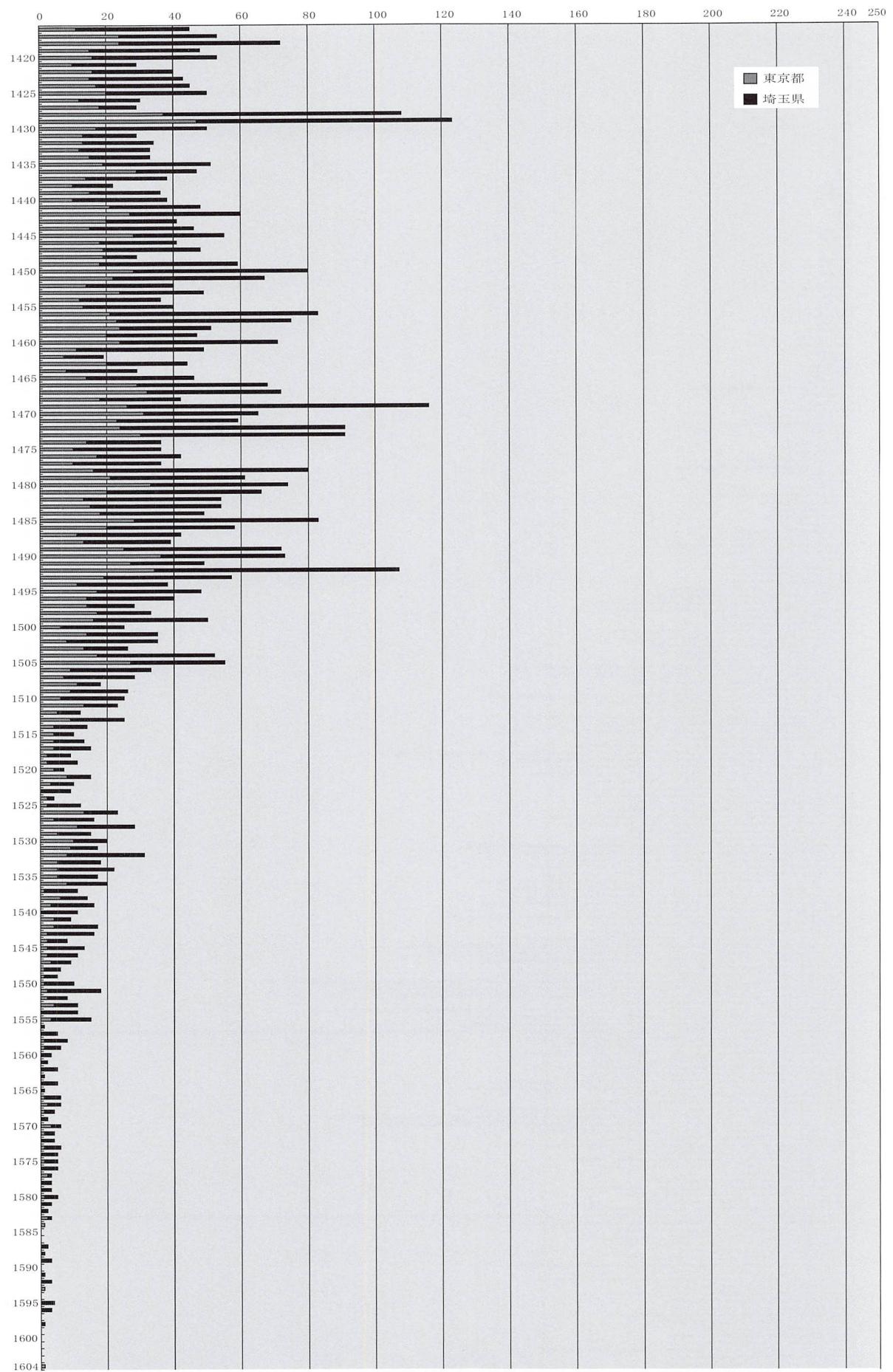


表 6-2 武藏国（神奈川・茨城・千葉県域分を除く）の板碑造立の推移（1年幅）